

エドウィージ・ダンティカ再考

—民俗文化再生のための多層的コミュニケーション—

Edwidge Danticat Revisited
Multilayer Communication for Reproducing of Folkloric Traditions

山本 伸*
Shin Yamamoto

キーワード：ハイチ、家族、記憶、継承、多層的コミュニケーション

Key Words: Haiti, family, memory, inheritance, multilayer communication

要約

本論はツヴェタン・トドロフが提唱する多層的コミュニケーションによる創造性を手掛かりに、ハイチ系アメリカ人作家エドウィージ・ダンティカの短編作品と最新エッセイを比較しつつ、継承や記憶、確信や選択といった観点からダンティカ文学の底流にある時空概念を超えたコミュニケーションの意味を探ろうとするものである。

Abstract

Based on the creativity of multi-layered communication advocated by Tzvetan Todorov, this paper compares the short works of Haitian-American author Edwidge Danticat with her latest essay, in order to verify the importance of communication that transcends the concept of space and time from the perspective of inheritance, memory, conviction, choice, etc.

1. コミュニケーションの多層性

死とはすべての終わりを意味するのだろうか、あるいは無になることなのか。中世のスペイン説話の一節「墓地を通った賢者」のなかに次のような詩が出てくる。

汝、挨拶もせずに通り返る者よ、立ち止まれ。

汝の耳と心をもってわが言葉を受けよ。

* 東海学園大学経営学部経営学科

われは汝の将来の姿なり。われはいまの汝の姿なりき。
平穩無事に暮らしおしとき、われ冷酷なる死をあざけりぬ。
されどそのとき死来たりて、われを友と家族から奪い去りぬ。
父を失える家族はわれを大地に埋めて嘆き悲しみ、
わが墓に永久の別れの供え物をせり。
かくて大地はわが輝く顔を腐食せしめ、
誉れ高かりしわが容姿もいまは地に伏す。
われもし土の蔽いを取られ、汝の目に触れなば、
かつての丈夫とは知るよしもなからん。
ゆえにわがために清き心もて神に祈りたまえ、
彼に永遠の平和を享受させたまえと。
わがために祈る者はみな集うべし、
われとともに天国に住まわんがために。¹

古い墓地の前を通りかかったある賢者が、遺骨の上に置かれた大理石の板に刻まれたこの詩を何度も繰り返し読んだ末に世俗を捨てて隠者になるという話であるが、この話にはさまざまな隠喩がある。盛者必衰の理、積学を経ての「空」の境地、そして何より、死者との対話である。すなわち大理石に刻まれた文字が、共時的にはあり得ない死者による死語の語りを可能ならしめ、生者である賢者が自らの実存を変革するに至るほどの衝撃を受けたという意味においての対話の実現である。その意味において、すなわち死はすべての終わりでもなければ、無に帰すことでもないのである。言い換えれば、死者による語りに生者が聞く耳を持つか否かによって、死の意味も変わってくるわけである。

この本質は近代になってもけっして色あせてはいない。そのことをヨーロッパによる植民地支配の歴史を通して、人間のコミュニケーションという観点から探ろうとしたのがブルガリア出身でフランスの思想家ツヴェタン・トドロフである。トドロフは *The Conquest of America: The Question of the Other* においてコミュニケーションの多層性について次のように述べている。

... the interpretation of the events occurs less in terms of its concrete, individual, and unique content than that of the preestablished order of universal harmony, which is to be reestablished. Would it be forcing the meaning of "communication" to say, starting from this point, that there exist two major forms of communication, one between man and man, the other between man and the world, and then to observe that the Indians cultivate chiefly the latter, the Spaniards the former?²

概して言えば、コミュニケーションには順に「人間対人間」、「人間対自然あるいは見えない世界」といった多層性があるとする説だが、この理論への展開の前提となっているのが新大陸発見時のスペインによる先住民王国の征服である。わずか数百人の部下しか率いていなかったコルテスが数十万の兵士を擁するアステカ王国をいとも簡単に占領できたのはなぜなのか。それには、コミュニケーションに対する考え方そのものが根本的に違っていたことが関係しているのではないか、という論理である。すなわち、「人間対見えない世界」のコミュニケーションを尊び、それを最優先していたことこそがアステカの敗因であり、「人間対人間」をコミュニケーションの常としていたことこそがスペイン人の勝因であったとするのである。具体的には、アステカの人びとが神のお告げ、つまり神託を待ち続けている間に征服の憂き目を見ることになったというのだ。しかし、トドロフは次のように続ける。

We are accustomed to conceiving of communication as only interhuman, for since the “world” is not a subject, our dialogue with it is quite asymmetrical (if there is any such dialogue at all) . But this is perhaps a narrow view of the matter, one responsible moreover for our feeling of superiority in this regard. The notion would be more productive if it were extended to include, alongside the interaction of individual with individual, the interaction that occurs between the person and his social group, the person and the natural world, the person and the religious universe.³

アステカは征服され、その後、ヨーロッパによる新大陸における植民地化が始まり、奴隷制を巻き込んで現代世界はヨーロッパ中心主義的な「発展」「進化」を遂げた一方で、アステカが征服される要因となった「人間対見えない世界」とのコミュニケーションが置き去りにされた結果、現代社会の人間のコミュニケーションのあり方はあまりに視野の狭いものとなり、人間が本来持っているべき人間としての真に豊かな「創造性」が阻害されているのではないか、当時のスペインの大勝利は、その実、現代世界の大敗、すなわち墮落や不寛容へとつながったのではないか、とトドロフは考えるのである。

本論考で取り上げるエドウィージ・ダンティカは、トドロフが阻害されていると語る「人間性の創造」を歴史という縦のベクトルと人類普遍という横のベクトルにまで押し広げながら創作を続けるハイチ系アメリカ人作家であり、それはまた彼女の執筆の目的および原動力ともなっているが、その背景には彼女の出自が大きくかかわっている。幼少期を過ごした生まれ故郷のハイチは、1980年代後半まで続いたデュバリエ親子による独裁政治、人口の約6割が一日200円以下で生活するという貧困、2021年のモイーズ大統領暗殺に象徴される政情不安⁴、合わせて31万人超

の死者を出した2010年と2021年の地震災害等々、幾重にも重なる困難にあえぎ続けている。

ダンテिका再考にあたって、トドロフの多層性のなかでも特に注目されるのは「人間と見えない世界」のコミュニケーションである。とりわけ、ダンテिकाがテーマとして繰り返し取り上げるのは「先祖」や「死者」とのコミュニケーションであり、そのコミュニケーションが現世の生者がいかに受け止めるべきかを示唆している点は、現代アメリカ文学の領域においてはきわめて特異であると言ってよいだろう。にもかかわらず、毎年のように文学賞を授与されていることからわかるように、ダンテिकाのこの特異な視座の様々な観点における普遍的価値は徐々に証明されつつあると言っても過言ではない。

本稿は、ダンテिका作品における「先祖」または「死者」とのコミュニケーションというモチーフに焦点を当て、最新のエッセイと四半世紀前の短編集を比較しながら、その変遷の有無を含めて、そこに込められたメッセージ性をあぶりだそうと試みるものである。

2. 移民と文化再生

ダンテिका自身を含め、ハイチ系移民にとってアメリカで生活することは決して容易なことではなく、むしろ苦難の連続であると言っている。言葉や習慣、人種の壁が立ちふさがるだけでなく、世代を経るごとにアイデンティティに変化が生まれ、世代間の軋轢を生みだしたりもする。つまり、出自の伝統文化の扱いに温度差が出てくるのである。この現実にはダンテिका作品においてたびたび扱われ、彼女の文学の根幹である「記憶による継承」というテーマの強い呼び水ともなっている。

世代間の軋轢と和解を扱った作品が短編集『クリック？クラック！』収録の「キャロラインの結婚式」である。冒頭の場面で、帰化証明書を手に息せき切って母親に電話をかける娘に母はすぐに郵便局に行ってパスポートの申請をするように促す。それこそがまずは移民悲願のアメリカ人としての第一歩であり、そうすることで身分が保証され、娘の身の安全に直結する証として一刻も早く入手するように母親は考えたのである。一方、姉とは違ってアメリカ生まれの妹キャロラインはむしろこのような証明書は必要なく、その分、移民としての危機感もなければ、母親などの第一世代がもつ伝統文化へのこだわりもない。それどころか、ときには母親の価値観に反発したり手料理を疎んじたりもする。次の引用は、ちょうど伝統と料理が見事にシンクロすると同時に、第一世代と第二世代の軋轢を浮き彫りにするものである。

このスープはどんな病気でも直せると母は信じていた。それどころか、何か奇跡さえ起こせると思っていた。例えば、キャロラインがバハマ人のフィアンセのエリックと別れるという奇跡さえも。何しろキャロラインがエリックと婚約したと家族に告げて以来、牛の骨の

スープが食卓に上らなかった日はなかったのだから。⁵

母親のスープに託した娘とフィアンセの破局の願いは、母親がキャロラインをあくまでハイチ人だとみなし、ハイチ人の女はハイチ人の男と結婚すべきだという古くからの価値観に端を発している。それに対しキャロラインは、母親がスープを作り続けるなら「煮え立つポットの湯のなかに頭を突っ込んで自殺する」⁶ と言って猛反発する。

そんな母親とキャロラインの間に割って入ってはこの世代間の軋轢を和らげる役割を果たすが、主人公の「わたし」である。「わたし」は母親と同じくハイチで生まれた第一世代だが、若くして移民したために母親ほどの頑固さはなく、出自の伝統文化とアメリカの新しい社会文化の間で柔軟で適度なバランス感覚を保とうとする。そして媒介者として、最終的には母親と妹の間を取り持つ重要な役割を果たすことになるのである。

しかし、そんな「わたし」が母親と妹、言い換えればハイチとアメリカの媒介項として成熟していく過程で、決定的な影響を与えたのが亡くなってからすでに十年近くも経つ父親である。記憶と夢を通して父親との再会は繰り返され、再会を果たすたびにアメリカの現在を生きる「わたし」はハイチの過去を再生産することになるからだ。キャロラインにとっても父親の存在は大きなものだったらしく、ハイチの因習への母親の過度なこだわりを疎んじる一方で、喪に服すために一年半もの長きにわたって黒い服を着るという伝統には素直に従った。もっとも、その下につける下着は赤と決まっていたにもかかわらず、母親には内緒でその伝統を頑として守らなかった点は、キャロラインのみならず「わたし」も同様だったが、すべてはもう一度父親に会いたいと望む切なる気持ちからだ。というのも、ハイチでは未亡人は死んだ夫の霊が夜な夜な迷って出て来ないように死者の嫌がる血の色である赤をつけるのが決まりになっており、もしその娘が母親似だったら娘もまた赤い下着をつけねばならない決まりになっていたからだ。その甲斐あつてか、二人は父親の死後、毎晩のようにかわるがわる父親の夢を見たのだった。アメリカ生まれのキャロラインもまた、夢のなかの父親を通して遠いハイチに触れることができたのである。

そんなキャロラインが、結婚を直前に控えたある日の夜、再び父親の夢を見る。自分は父親の方を眺めながら必死に呼びかけるのだが、父親の方は一瞥もしてくれないという切ない夢だった。その話を聞いた「わたし」は、母親が反対する結婚を父親が「おまえは正しい選択をした」⁷ と認めてほしい気持ちの現れだと思いやり、父親の口癖であったハイチの諺を妹に送る。「じっと忍耐強く我慢していれば、そのうち蟻のへその穴だって見えてくる」⁸ それを聞いたキャロラインは「雨がどんなに強く犬の肌に当たっても、そのまだらを洗い流すことはない」⁹ と言い返し、そこからハイチの諺が二人の間であふれ出す。

こうして、父親の記憶を通してブルックリンの現在に再生産されるハイチの過去は、その度合いの違いこそあれ、「わたし」にもキャロラインにも大きな影響を与え続ける。それはキャロライ

ン自身の母親の気持ちを理解しようとする努力と、間に立って何とか二人の気持ちを和らさせようとする「わたし」の試みとなって、やがてそれらは見事に結実するのである。まさにこれこそがトドロフが示したコミュニケーションの多層性が生み出す、より豊かな創造性そのものであり、娘たちと父親のこの世とあの世のコミュニケーションは二人に生涯この豊かさを与え続けることになる。

ダンティカは、人は三度死ぬと言う¹⁰。一度目は心臓が止まったとき、二度目は葬式、そして三度目は人びとの記憶から消えたとき、である。記憶は「わたし」やキャロラインが見た夢の源であり、ハイチの伝統文化を再生産するための糧でもある。母親とのこの世でのコミュニケーション同様、いや、むしろもはやこの世にいないからこそ、あの世の父親とのコミュニケーションを反動形式的に切望し、父親の記憶をたどろうとする衝動は、その絆が強かった分、より大きいものであるに違いない。そして、その衝動の大きさは、トドロフのいう真に豊かな創造性の大きさに比例するのである。

3. 記憶と文化継承

「キャロラインの結婚式」からちょうど四半世紀を経てダンティカが出した最新エッセイ¹¹は、これまで述べてきたトドロフのコミュニケーションの多層性が生み出す創造性に対する、ダンティカの確固たる信念と信頼が前面に押し出されている点で注目に値する。そして、それはやはり記憶によっていざなわれる夢によって展開する。

Sometimes I think *my mother and father are parenting me from the grave*. A few weeks ago, I dreamt that I was pushing a mini-hatchback up a steep hill, with my mom and dad on either side of me, helping. In the dream, both my parents are the ages they were when they died: my father sixty-nine and my mother eighty-four years old. After Sisyphean effort was exerted toward getting the car to the top of the hill, the three of us celebrated by contemplating the magnificent view of a beautiful green meadow below.¹²(イタリック、ゴシックは筆者による)

すでに両親を亡くしているダンティカが見たのは、急な坂を小さなハッチバック車を三人で押し上げようと必死になっている夢だった。父親も母親も死んだときの年恰好だった。まるでシシュポスの石¹³を押しつかぬような無駄な努力を重ねた結果、車は無事坂を上り切り、眼下には絵のように美しい緑の草原が広がって見えたという。ダンティカがいまなお抱き続ける、墓から *parent* されているというこの感覚は、まさに「キャロラインの結婚式」で娘たちが繰り返した死

んだ父親とのコミュニケーションのそれと重なるものである。

ところで、この *parent* という言葉には一言では言い表せないほど多くの含意がある。「育てる」であったり、「(見) 守る」、「教える」であったり、ひいては「作り出す」、「修正する」であったりもする。これらすべてが合わさったものが、夢と記憶を通してダンティカの元へと発信され続けるのである。

ダンティカがこの時間的な距離感、いわば縦の距離感を物理的な横の距離感とさほど違わないものとして受け止めている点は、言い換えれば、生と死の間にある距離感そのものをあまり感じていないことの裏返しだと言えるだろう。

The idea of my parents *communicating from a great distance is not new* to me. When my mother and father moved to the United States from Haiti in the 1970s, both to escape a brutal dictatorship and to look for work, they left me and my younger brother behind, in the care of another uncle and his wife. From the time I was four till I was twelve, my parents and I communicated via letters, a weekly phone call, and cassette tapes carried by friends and acquaintances between Brooklyn and Port-au-Prince.¹⁴ (イタリック、ゴシックは筆者による)

独裁政治から逃れようと両親がアメリカに渡った後、手紙と電話、そして友人たちが運んでくれる声を吹き込んだカセットテープだけが、ニューヨークとポルトープランスの距離感を埋めていた4歳から12歳までの9年間を、両親の姿を一度たりとも目の当たりにすることなく育ったダンティカにとって、その姿はもはやそれらのコミュニケーションを通して感じるしかない記憶の再生産でしかなかったはずだ。その意味においては、両親のいない現在の感覚は、離れて暮らしたかつての9年間のそれと同じ感覚なのかも知れない。

この時間と距離の縦横に離れたコミュニケーションの展開は、ダンティカと両親のみならず彼らの先祖と子孫にまで押し広げられるというのが、このエッセイの骨子である。一組の親子によって構成される核家族ではなく、多世代にわたる大家族にさえもとどまらない、すでにこの世にはいない先祖とまだ生まれてもいない子孫をもすべて含み込んだ集合体こそが家族だとするダンティカの主張の底流には、文化や習慣をはじめ、さまざまな種類の「継承」がある。しかし同時に、「革新」や「選択」といった柔軟性が同時に含まれていることを見逃してはならない。そして、それすらもが次にあるように記憶によって「継承」された「創造性」に他ならない。

Family legacies, my father used to say, are not only about traditions and values passed on from generation to generation. They are also about the actions we take or choose not to take. In the

mountain village where my uncle and father were born, a single deed could mark or stain your family's reputation for generations, placing you in a hierarchy that, if only enforced by gossip or shame, might still decide the fate of your progeny. I am not sure that's still true, but my father held on to that notion until his death, in part because it was taught to him by his father, who had learned it from his father. This is why they had to leave the ancestral village and move to the capital, my father would say. Though neither he nor his siblings had committed shameful acts, they longed to start over in a new place where the generational burden was less weighty. *Their new beginning was meant to be a reboot, though, not an erasure.*¹⁵

「継承だけでなく取捨選択すること」がダンテカ家の伝統だという父親の口癖の通り、ダンテカ自身もまた、そうすることでまさに人は *reboot* (再起動) できると確信しているに違いない。そして、それには「今ここにいる」核家族ではなく、過去と未来を含み込んだ大家族の概念が必要であり、さらには彼らをつなぎ、絆を育む「記憶」が不可欠であることを訴えるのである。

結び

こうして見てみると、ダンテカ文学のテーマは四半世紀を経てもなおまったくぶれていないことがわかる。それはハイチの民俗的な価値観を基盤としつつ、アメリカとハイチ、この世とあの世、現在と過去を縦横に行きかう意識の広がりであり、この広がりこそが「いま、ここ」にいる者の実存に大きな影響を与え、ひいてはその人生を豊かにするという信念である。その信念に裏打ちされて発信されるダンテカのメッセージは、まさにトドロフが懸念した現代を生きるわれわれへの警鐘として受け止めるべきではないだろうか。つまり、それは人や社会が死者や先祖、神々といった見えない存在とのコミュニケーションをおろそかにすることによって、本来がわれわれが持っているはずの「人間的」創造性が希薄化していることへの警鐘である。

いわば近代と前近代、西欧と非西欧の媒介者として、近代合理主義のあふれかえる社会を舞台に創作されるアメリカ文学において、ダンテカ文学の魅力と価値は今後ますます高まっていくに違いない。

注

- 1 ペトルス・アルフォンシ／伊藤正義訳『賢者の教え』 pp.146-7
- 2 Tzvetan Todorov, translated by Richard Howard, *Conquest of America: The Question of the Other*, University of Oklahoma Press, 1999., p.69
- 3 *Ibid.*, p.69
- 4 外務省「ハイチ共和国」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/haiti/index.html>
- 5 「キャロラインの結婚式」、p.166
- 6 同上、p.167
- 7 同上、p.181
- 8 同上、p.181
- 9 同上、p.181
- 10 Edwidge Danticat, WE ARE UGLY, BUT WE ARE HERE, *The Caribbean Writer, Volume 10 (1996)*
- 11 Edwidge Danticat, Not Just Nuclear Families Are Elders Long Buried and Generations Yet Unborn, *PLOUGH QUARTERLY NO. 26, NOVEMBER 19, 2020*
<https://www.plough.com/en/topics/justice/social-justice/immigration/not-just-nuclear>
- 12 <https://www.plough.com/en/topics/justice/social-justice/immigration/not-just-nuclear>
- 13 シーシュポスはコリントの狡猾な王で、死後地獄に落とされ、大きな岩を山頂まで転がし上げる罰を与えられるが、岩は山頂に近づくといつも下に転がり落ちるのだった。
- 14 Edwidge Danticat, Not Just Nuclear Families Are Elders Long Buried and Generations Yet Unborn, *PLOUGH QUARTERLY NO. 26, NOVEMBER 19, 2020*
<https://www.plough.com/en/topics/justice/social-justice/immigration/not-just-nuclear>
- 15 *ibid.*

引用・参考文献

- アルフォンシ、P: 伊藤正義訳．1993．賢者の教え．岩波ブックサービスセンター．
- 外務省「ハイチ共和国」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/haiti/index.html>（最終閲覧日 2021 年 10 月 14 日）
- ダンティカ、E: 山本伸訳．2001．クリック？クラック！五月書房新社．
- Danticat, E., 2020. Not Just Nuclear - Families Are Elders Long Buried and Generations Yet Unborn.
In: PLOUGH QUARTERLY No. 26, NOVEMBER 19.
<https://www.plough.com/en/topics/justice/social-justice/immigration/not-just-nuclear>
- Todorov, T., translated by Richard Howard, 1999. *Conquest of America -The Question of the Other*.
University of Oklahoma Press.